

お別れ遠足…奈良・東大寺大仏

6年生は年度末に「お別れ遠足」で、奈良を訪ねます。この遠足は思い出に残る「記念行事」と歴史学習を兼ねたものです。そこで今回は、東大寺の大仏に関わる歴史文化を語ります。



聖武天皇…悲しみの力

「廬舎那仏」は「奈良の大仏さん」と親しまれている仏様のことです。では、廬舎那仏を建立したのは聖武天皇ですが、一体どんな人だったのでしょうか。当時は、干ばつ、飢饉、大地震、天然痘などが続き、内乱が起きて人が殺しあう、とても大変な世の中でした。そして、天皇の御子も死んでしまいました。聖武天皇は「すべての生あるものが、幸せになってほしい」と心から願っていた人でした。それは自分の力を誇示するために、巨大な建築をした時の権力者とは一線を画すものです。しかし、現実には天皇の願いとは全く逆、逆、逆でした。そして、天皇はこんな世の中になってしまったのは、「自分の政治が悪い、自分が至らないから、天が罰を与えた」と考え、すごく苦しみました。聖武天皇は、「苦しみの人」でした。

このような状況の中で、聖武天皇は、「どんな気持ちになっていたのか」「どのように苦しんでいたのか」を想像してみることで、つまり魂の叫びに迫ることも大切ですね。歴史と向き合うことは、「史上の出来事や人物と向き合うこと」「歴史を自分に重ね、向き合うこと」に繋がります。さて、ここで聖武天皇の御心を深く探っていくことにします。天皇は大仏建立の際に不思議なことを言いました。「大きな力で造るな たくさんの富で造るな」です。巨大な大仏を造るのに変ですね。



そして、天皇はこうも言いました。「一本の草を、一握りの土を持って建立に加わりたいと来る人がいたら、その人に協力してもらいなさい」と。しかし、現実的には、一本の草や一握りの土を持ってきても何の役にもたちません。大きな富や力のほうが、絶対に役に立つはずですが、また、天皇は現場で働く人たちに、「朝昼晩1日3度、(まだできていない)大仏に拝みなさい。そして自分の心の中に大仏を造りなさい」と言いました。形なき未完成の大仏に拝むのも変です。察するところ、天皇は心ひとつにして、大仏を造りたかったのでしょうか。大仏建立に携わった人は間接的な支援や提供も含めて、およそ260万人です。当時の日本の人口が500万人と推定されますから、民のおよそ半数が関わったこととなります。

では、大仏が完成して世の中は変わったのでしょうか。人は貧しさから逃れられたのでしょうか。いいえ、何も変わりません。現実を変えることなどできないことは、わかりきったことです。また、天皇は「沢山の富と大きな力で大仏を造るな」とは言ったものの、それは理念であって実際には沢山の富と大きな力なくしては、建立は叶いません。大仏建立は実効性のないハコもので、膨大な国費の無駄遣いかも知れません。皆さんは巨大な大仏を造る富と時間と労力があつたら、そのお金を、その時間を、その労力を貧しい人々の救済に充てたほうが良いとは思いませんか？

ではなぜ天皇はそこまでして、大仏建立にこだわったのでしょうか。その真意を探ることは至難です。なぜなら、私たちはその時代に生きてはいないし、聖武天皇ではないし、それほどの叡智を持ち合わせていないからです。御心を察するに、私たちは貧し過ぎるようですが、以下に解釈をを述べていきます。

仏教の起源とお釈迦様の誕生

大仏に迫るには、まずは仏教の起源とお釈迦様の誕生、即ち原点に着目したいと思います。釈迦（本名：ゴータマ・シッダッタまたはガウタマ・シッダールタ）、漢訳では瞿曇悉達多(くどんしだつた)は、今から2500年ほど前の実在した人物です。シャーキャムニ(サンスクリット語)は「シャーキャ族の聖者」という意味の尊称で、これを漢訳した釈迦牟尼(しゃかむに)をさらに省略して「釈迦」と呼ばれるようになりました。ちなみにブツダ(サンスクリット語)は、「悟った人」を意味する釈迦の尊称で、漢訳は仏陀、旧字体では佛陀と書きます。「仏教」という名称や「仏像」などの呼称はこの尊称に由来します。釈迦の父は、ガウタマ氏のシュッドーダナ、母はアヌシャーキャの娘マーヤーです。2人の間に生まれた釈迦はシッダールタと名付けられました。母のマーヤーは、出産のための里帰りの旅行中にルンビニで釈迦を生み、産褥熱でその7日後に死んでしまいました。釈迦は、自分を産んで死んでしまった母のことを想い、悲しみ苦しみました。「なぜ、自分はこの世に生を受けたのだろう」「自分が生まれさえしなければ、母は死ぬことがなかったのに…」。



仏陀立像

仏教の原点はここから始まります。生きること、いのちあることの苦しみと悲しみをもって、仏教は生まれたのです。もし、安産であったなら、決して仏教はこの世に存在しなかったはずです。仏教の力(教え)とは、悲しみや苦しみの力(悲嘆力 慈悲)でもあるのです。

神様と仏様の決定的な違いは、何でしょうか。神は与えるもの、仏は皆(の心)にあります。創世記にあるように、神は天地創造し、人をつくり、その下に動植物をつくりました。神は絶対的な存在、そして人は生き物の中で特別な存在です。一方、仏はどうでしょうか。「成仏する」という言葉が示すように、人は修行を積んで仏様になれるのです。ちなみに菩薩様は、仏様になる手前の存在です。わざと手前で踏みとどまることで、人と仏の間を取り持っています。仏様は神様のように上から目線で見ると、与えるのではなく、身近に温かく私たちを包み、悲しみを慈しんでくださる存在なのです。

御仏(みほとけ)の慈悲

大仏建立に関わっては、仏心(慈悲)をもって、生けるものへの拠所にしたいという聖武天皇の切なる想いがあったのでしょうか。天皇は建立の事由を、「全ての動物、植物 生きとし生けるものの救済」としています。つまり、人は動物のひとつであって、すべてのいのちに関わって慈しむ天皇の御心がここに見られます。だからこそ、「沢山の富と大きな力で大仏を造るな」と言われたのです。名もなき多くの民衆が関わってこそ、草一本土一握りをもってこそ、大きな仏様が大きな救いとなり得るでしょう。そして、できていない(できつつある)大仏に朝昼晩と拝むことで、その胎内に多くの人々の想いが宿り、心身一体と成した大仏様に帰依することができる、天皇は考えたのでしょうか。もし富で人々を救済し得ても、それは一時(いつとき)の潤いで終わってしまいます。かたや御仏(みほとけ)の慈悲(悲しみを慈しむ心)は、決して富にはかえられない永遠無限のものです。仏教は遙か昔から合理的な現代社会に渡り、途絶えることなく脈々と続いています。その証左に大仏様は752年に完成し、途中二度にわたる戦禍焼失にあいながらも見事に復興し、今もなお多くの人々の拠所となっているではありませんか。これ

ぞ、紛れもない事実で現実です。つまり、悲しみの力こそが、お釈迦様に由来する仏の力なのです。天皇が大仏建立に求めたものは、ここにあると私は信じます。

では、二度の苦難に会いながらも、復活した大仏様、そこにはどんな経緯があったのでしょうか。最初に焼かれたのは、今から800年ほど前、平安時代末のことです。源氏と平氏の争いで、東大寺は源氏側についていたので、平氏の軍勢によって焼き討ちされてしまいました。当時、大仏殿には約1000人の僧侶が隠れていました。大仏と一緒に居れば大丈夫だろう、守ってくださると思っていたのが、大仏様と悲運を共にしてみんな焼け死んでしまいました。これが現実です。何だかんだ言っても、世界はちっとも変わらないのです。人はそれぞれ考えや生き方が違います。だから、みんなが仲良く暮らしていくことなど、過去にも現在にも未来にもあり得ないことです。国や個人の対立は、いくら願ったところで、解消しないのです。ですから、普通ならもう(巨費と労力がかかる)大仏は不要となるところです。

ところがそこに再建を唱える重源という僧侶が現れました。お金はない。そこで重源は日本中を回って、寄付で資金を集めることにしたのです。寄付集めの手法については、「尺布寸鉄といえども」という言葉が、重源さんの勸進帳(建立のため寄付金をあおぐ趣旨を記した文書)に残っています。尺布とは、1尺(33cm)の長さの布、寸鉄とは1寸(33mm)の鉄です。いわゆる端切れや鉄釘1本程度で、これは聖武天皇の草1本土一握りと共通することです。このようにして大仏は再生をみますが、また戦国時代に焼かれてしまいます。今度はなかなか復興できなかつたのですが、100年位経って、今度は公慶という僧侶が現れ同じように寄付集めに回ります。



重源(大阪府立狭山池博物館)

公慶さんの勸進帳には、「一針一草の喜捨」とありました。聖武天皇や重源さんと同じことを言っているのです。いつの世も、どんな時代においても、人々の苦しみや悲しみは存在します。だからこそ、聖武天皇の御心を継ぐ重源や公慶のような人が現れるのでしょうか。御仏の慈悲が必要とされるのでしょうか。

歴史学習は、通史から人物中心と言われるようになって久しいです。人物中心は、単に業績を調べるだけではなく、他人事にしないことが肝要です。廬舎那仏を拝む時、身を焼かれながらも、多くの人々の苦しみや悲しみ、願いを慈悲の心で今なお温かく包みこむ御仏の姿に、畏敬の念と言いようのない感動を覚えます。

参考資料 ①ウィキペディアの各項目 ②「こころの時代 仏教に学ぶ 悲しみの力」(NHK) 西山 厚写真 「聖武天皇」「釈迦立像」「重源」Wikipedia フリー写真